

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

進撃の羊

## 【作者名】

屯

## 【あらすじ】

気づけば羊。何やら妖怪らしい。

何か勘違いもされちゃった！

でもでも、頑張ります。

弾幕使いになって、魔法羊になって。

勘違いされたっていい。

俺から私になっても。私はただ主人を守り、癒すだけだ!!

く羊がもふりたいベストく

\*

気がつくとも森にいた。

なぜかあり得ないくらい体が軽くてテンションが上がったひゃっ  
ほほーい!!

……お腹すいたなあ……

森をさ迷つ。

その時思わず目に入ってきたのは青々とした元気いっぱいなク  
ローバー達。

……つまそつ。

えっ？

俺今なんて……？

いや、今はそんなことはどうでもいいんだ。

そして俺は目の前の無防備なクローバーに……。

ムシャア…！（＾o＾）

『めええ（つめえええ!!）』

え、どうしよう、すんげえうまいんですけど。

なにこの…この甘さ控えめのゆるしいな草は！（クローバーです）  
これはいけない。戻れなくなりそう。いや、こいつらがここに生えてるのがいけないんだ。そうだ。

そのままもぐもぐむしゃむしゃ腹の虫が収まるまで食べていたが、ふとある問題に気づいた。

さっき、めえーつってよね、俺。

そうとなれば湖へ！

幸い湖はすぐそこにあっただので問題はない。

覗いてみると。

そこには、守ってあげたくなるような、もふりたくなるような、もふりたくなるような（大事な事なので二回言いました）

かわいいかわいい羊が映っておりましたとさ。

ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンンンン!!!あ…あ…！…！！ん…  
がわ…い…い…！…！！

なにこれ絶世の美女じゃんか。ジャン ！

ぼく、ぼく、ぼく、ちーん、カンカン!!

戦いのゴングが鳴るううううう!!

そつだ、そつだ、東方だ！東プロだわこれがあつたわ（ホッ）

あ、東方的にマスタースパーク出来ないかな！

なんかたぎってきたぞオオオ俺!!

今なら行ける気がする！

よっしゃあ！愛と勇気の！

『（マスタースパーク!!）』

キュイイイン

どづううううううううん!!

どぎゃーん!!めえーめうー!!

めええええー!!

ワロタ

…ワロタ

あれ、俺名前なんだっけ？思い出せない。  
その途端に頭に走るフラッシュバック!!



たのдарう。うん。

うん、そうだそうだ、牛乳に相談だ。

って牛乳無いんだったわ…（、・・・）

—————

さっき思いついたこと考えた。

それは『東方の二次小説みたい人間になれるのかというもの。』

『んめ〜（でもこれ妖力いるんだったよな…？）』

そのときだった。

ガササッ！

『!?!』

「あらもっ、心配したのよー！」

えっ？新車の詐欺かな？

身内のふりして実は…みたいな

俺の家があるという村（？）への道すがら、いろんなことを聞いた。

話を聞いていれば、なんでもその村は今なにか原因不明の襲撃に

あつたらしく、復興中らしい。

…ごめん、それ俺だわ……

ガササア!!

「あぐっ」

熊さんが羊食ってた。

逃げるが勝ち。

途中背後で

「畜生…あいつを売」

え、あの…それって

俺売られそうになったのか…!

さっきの湖にて。

まあどうにかして人間になってみよう。…ぼわんと。

ぼわん。

出来たらしい。

俺すごくね？

湖を覗きこむ。

…こりゃあ鼻血もんやでえ…

そこに映ってたのはロリ。

ハニーマルク色の髪が眩しい。

オッドアイなのか、淡い紫と水色の瞳がこちらを不思議そうに覗きこんでいる。

こりゃあ勃 もんやでえ…でも、これからどうしようか。

主人公は自分の名前は分かりませんがオタク知識は覚えてます  
そして異世界に転生してるのはちょっと自覚してます。でもまだ可能性の範囲内です。

(ジャングルがどっかなのかな…アフリカとか)

…とりあえず、この森でるか。

『おつとつとお…』

二足歩行お帰りなさい!!

なんか気分も上がってきたぞ…!!



『あ、そつだ食料食料』

忘れてた。あーやばかった。

『もちろんクローバーだよなっ』

四つ葉ってどんな味なんだろ…

じゅるり。

その日丸一日探しても出てくるのはおいしいクローバーだけだった。

【幻想】羊【現実】

何故とは問わない。

世の理不尽を知っているからだ。

どうしてとは言わない。

世の美しさもまた、知っているからだ。

でも、

でも。

『これはひどい』

あの後壊滅状態にした村がどうなったか気になって（食料的な意味で）

村に行った訳だが。

いま俺のもこもこの毛をつつくこの指には耐えられそうにない。

『んめえ（もっと優しく触りやがねっしーの）』

そう。

巨人である。

最初の絶望は異世界転生を本当にしてしまっていたことについて。  
そして二番目の絶望が…

進撃の巨人の世界かもしれないねってことだよおおおおおお  
ううううう!!!

俺は今巨人の手のひらに転がされている。アレ？動物には手出さないんじゃないの？俺人間じゃないよ？いつの間にかパクリ  
だったらと思うと…ガクガクブルブル

グシャッ！

あ…これ、今家っぱいの踏みましたよね…？藁や雑草を山にして  
下に浅い穴を掘ったようなの見えたんで…家かと思ったんですけど  
…

もういいや、気にしないでおう。せめてもの甲いにと、俺はレー  
ザー砲のようなものを作った。愛と勇気のマスタースパーク（笑）の  
細いバージョンを意識する。

むむっ…中々に難しいが…いけそうか？いくぞーっ、

キユイイイイン

ピュルルル…

ドゴオオオオオオオオオ…！！

『めめー！（見る！人がゴムのようだ！！）』

『（んん…？）』

頭の中に文字が浮かんで来るようだ…

【幻と現を司る程度能力】

えつとだな…妄想が現実にもなるんですか？

何それクソチート。

てか俺はやっぱり妖怪だったのか…（歓喜）

でも東方じゃ人間でも能力持ってたしな、でもいいや、幻想の羊妖怪でも。

とりあえずは、忘れかけていたがこの巨人からの脱出だ。飛べるようになるう…！

こつ、ふわぁーと、いかないもんかね…？

まあここは、人型のほうがやり易そうだし、人型いつてみるか。

『ふんっ』

ぼわわん！

おー、ハイハイロリ巨乳ロリ巨乳。

『これが……おっほい……』

あああ、今はそうじゃない、飛ぶんだった。

くその後、普通に飛べましたく

手頃な木に降りてさっきの巨人を観察する。  
巨人はさして気になっているようすもなく、そのまま平原へと歩いていった……………

「く完く」

終わらせねえよ！

そんな漫才をしていると、とおくのさっきの巨人が消えた平野から小さな粒がこちらに向かって来ている。

…人だ！馬に乗っている！

興奮した俺はそのまま身を乗り出して…

ゴキッ

落下しました。

寸前なんとか飛んだお陰で捻挫で済みましたアアアアアア

でも痛くてうげんんんんん!!!

『じゅっ………じゅっ……お……い……だあッ!!』

### 第3話

『…』

さっき落ちたときに痛めた足首が凄く痛い。少し動かしただけでもガンガンするし。

『治せないかな…？』

なんかもつこの体なら喋る言葉は女口調でいいや、でも中身は男でお願いします。壁に耳あり障子にメアリーってことで。

俺の能力は『幻と現を司る程度の能力』…司るってことは操るも道義でいいのかねえ？

『操る』と違い、自分自身を能力そのものにするような感じで、無理なく、それこそ手足の様に使えると言っことなのだろうか…？

『今は治療に専念しよう』

ん…？上手く使えば、不老不死になれるのではないか？

俺の考えは余りにもバカバカしいし、やっつけてしまえば戻れないかも知れない。

『でも…まあ…』

どこの世界においても死ぬことは終わりには変わらないだろう？

でも、壁があつて、巨人がいるのならば。

経験を積んで彼らを手助けするのモ。

『ようじ、いっちょやってみますか〜』

悪くないと思つたんだー

コケッ

『いってえー！』

\*\*\*\*\*

ーと言つことになれたと思います、不老不死。  
じゃあ実験といきましょ〜!!

『でででででででん、でででででででん』

そこらの砕いた石で皮膚を裂く。

痛みはなかつた。

『あれ…っ』

血は出てるのに、傷口がない  
石には血脂が着いているのにない、ない!?



ならば、もっと大きな傷口ならば分かるのでは。

さつき痛く無かったし、と馬鹿野郎の俺はそのまま妖力を編んで作ったワンピースを捲った。

……………なんかひげゲフンゲフン。

ぐっ！ぐぐ…にゆる

『!!!??』

傷口がそのまま塞がったのだ！

石を呑みかけた腹の皮が異物感に悲鳴を上げる。

『(排出…排出する！)』

ほどなくすると石は痛みもなくずると出ていった。

……………これは痛み慣れする必要があるな。

さつき兵団ぽいの見だし、やばそうだったら助けにいかうか。

あとさつきの能力、幻想卿の住民たちの能力を使えるようだ。幻想繋がりと考えるのが宜しいかもしれないな。

それでは今は兎のていちゃんのを能力を使わせて貰おうしよう。

『人を幸運にする程度の能力、ね…いい力だ』

たたたたたっ！

走る。

走る。

走り続ける。

羊なので疲れない。慣れた山道だから。

血の匂い、所々煙臭かったりする。

『…！』

なんて光景だ。一番分かりやすいのは、地獄という表現。

この戦場を走り抜けるからには羊の姿では不自由するだろう。そもそもあの姿はリラックスモードとお風呂シーンくらいにしか使わないんだ。

布切れを持って、薄紫の左目に巻いていく。

薄青の右目は、ほかの人にはない色と言っ訳ではないから、布は巻かない。

『準備完了』

それでは。

『ひっぎ、ひっぎまーす!!』

名前は羊に掛けて『ひっぎ』。

うん、いいかもしれない。

ていちゃんの能力を纏って、私は裸足で駆け出した。

羊「じっちゃん」の名に掛けて!!!